

---

それいけめーりん 紅 美鈴 立志編

旭日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それいけめーりん 紅 美鈴 立志編

### 【Nコード】

N7829F

### 【作者名】

旭日

### 【あらすじ】

東方の登場キャラ、紅美鈴を主人公にした短い話。

## 第一回投稿分

鬱蒼と生い茂る森が続いていた。

濃い霧のかかる辺から湖を見かけて四半時ほど。歩きつづけているが、よほど広大なのか、いつまでたっても向こう岸にはたどり着く様子がない。

「ふっ…」

一息ついて、美鈴は水辺までやってくると、荷物を下ろして、肩のこりをほぐした。

水面をのぞきこみ、ばしゃばしゃと顔を洗う。

「ふっ」

ひと心地つきながらあたりを見回す。深い霧におおわれて、視界はほとんどきかず、うっすらと霞む景色だけがえんえんと続いている。

「…このあたりのはずなんだけど…」

ひとり呟きをつきながら、美鈴はふと顔に、水以外の異様な感触を覚えた。

「わっ！　　わっ！？」

びっくりしてぱたぱたと手で顔を払う。

ぱらら、と白っぽい粉のようなものが落ちる。よく見てみると、

こまかい氷の結晶だった。…どうやら、顔に張りついていた水が、急に凍りついたようだった。

くすくす、きゃはは、という子供のようなかわいらしい笑い声が聞こえた。反射的にそちらを見てみるが、ぞっとすることにそこには誰の姿もない。

「まったく…」

まつげの氷片をつまんでとりながら、美鈴はため息をついた。妖精というやつだろう。

ふもとの里で噂には聞いていた。この湖には、大勢の妖精がすんでいるらしい。

妖精は総じていたずら好きで、人を困らせたり、驚かしたりしては喜んでいる種族である。頭の中身はせいぜい幼い子供並みだからたいしたこととも思いつかないのだが、そのぶん、分別もないのでたちが悪かった。

根は臆病なくせに、人間や妖怪のことは面白いおもちゃでいどにしか心得ておらず、自分のすみかに入ってくると、わざと迷わせてからかったりもする。

ときには迷わされたあげく、二度と帰って来られない人間もいるそうだが。

なににせよ、あまり関わり合いにはなりたくない相手だ。美鈴はさつさと水筒の水をくむと、荷物を負いなおしてその場を立ち去ることにした。

「まいったなあ…暗くなる前に着くかしら…」

また森の道を歩きだしながら、美鈴は途方に暮れた眩きをもらしていた。

正直言つて、ここまで道行きに難航するものだとは考えていなか

ったのだ。里の人間の話によると、くだんの館へ至る道は、間にまたがる湖畔を、森を迂回して抜けていくしかない。

湖を船で渡れば早いのだが、湖上はどうも、例によってさきほどのような妖精達のためり場と化しているらしい。なかでも恐ろしいのがそのなかの一匹、「氷の妖精」と呼ばれている者で、湖を渡ろうとする者はたちまち氷の塊に変じられ、湖底で永遠の眠りを見続けるはめになるそうだ。

「それにしたって…かかってもせいぜい、一時間くらいの距離だつて言つてたじゃない…」

誰にともなく、ぼやいて言う。

たしかに、聞いた話ではそういうことだったのだが、美鈴の感覚が正しければ、出発してもつかるく数時間は経っているはずだった。日がまったく見えないので、正確な時間もわからないが、少なくとも昼間は近いはずだった。…その証拠になるものは、さっきから自分の身体が数回ていどは鳴らしているが。

「はあ…お腹空いた…」

がさがさと茂みをかきわけながら独り言を言う。聞いたままを信じていたので、当然食料の手持ちは少なく、こころもとなかったのだ。…そもそも、そんな路銀はないので、里でも食料の調達はろくにできなかつたのだが。

「あーあ…このまま飢えて死んじゃうのかしら…って、わたし妖怪だから、飢えたくらいで死ぬわけないんだけどね…」

言葉と表情の割には、どことなくのんきな様子が抜けきらず、美鈴はそんなことを言いながら歩を進めていたのだが、ふと、顔の

すぐ近くで、しゅとん、と乾いた物音を聞き気がして、そちらを見た。

「…ん？」

美鈴は目に入ったものを見て、ほうけたように呟いていた。びいいんと、顔のすぐ近く、木の幹に突きささる形で、なにかが突き立っているのが見える。

(…これ…ナイ、フ…?)

そう思った瞬間、ひゅひゅっと風を切る音がして、またたく間に三本のナイフが近くの幹に突き立った。

「はわっ!!」

うっかり尻餅をつきそうになりながらも、それをかわした美鈴はわたわたと立ち上がると、その場を逃げだした。

(なっ、なに!? なんなの!?)

いったいなんなのか。それはわからないが、とにかくあの場に立ち止まるのはいけないだろう、と美鈴は素早くそう考えた。

その気になれば、美鈴は半端でなく速度の出せる強靱な脚力の持ち主だった。木々の間を縫うように、真っ直ぐに森の中を駆けていく。

その俊足ぶりたるや、人間ばなれしており まあ、言葉どおりの意味でまさしく美鈴は人間ではなかったが とにかく、そういう具合で、常人ならこれを追跡することなど可能の範囲にはないほどの勢いだった。たちまちにもといた場所からだいぶ離れたところまで

逃れると、さすがに少々荒くなった息をついて、美鈴は手近な木の陰に、滑りこむようにして身を隠した。

「はあっ、はあっ…」

胸に手を突いて、どうにか息を整えると、美鈴は木の陰からそつと辺りをうかがった。

巻いたのか。

すがめて見える森の木々の間からは、ほどよい静寂しか返って来ない。気配を読むなどという気の利いたことができるほど美鈴は感覚が鋭くないが、生まれつき、目の動体をとらえる力だけは良かった。

そもそも、あれでは相手の正体もろくにつかめなかったのだが、武器を使ってきたのだから、おそらく相手は人間ではないか、となんとなく美鈴は予測を立てていた。

(まあ、人間なら…あの速度についてこれるはずは、ないんだけど…)

そう思っていると、ひゅおっ！と素早く風鳴りの音が鳴り、すどんと、と三本のナイフが隠れている木の幹に突き立った。

「うわっ！！」

美鈴は即座に顔を引っ込めた。それを追いかけるようにして、木々の間のどこかから、涼しげな女性の声が聞こえてくる。

「残念だけど、見えてるわよ」

え、とあわてて美鈴は声の聞こえた方を見回した。が、目に入る範囲で動くものの姿をとらえることは出来ない。

それよりも、声が聞こえてきたのは、ナイフが飛んできた方とはまるで逆。つまりは木に背中をつけている美鈴の姿が、ちょうどはりついた射的の的のように見えるだろうか、そういう位置から聞こえてきていた。

…つまり、それがどういことなのかわからないほど美鈴も鈍くはない。

「試してみるのはあまりお勧めしないけどね。少しでも動いたら次は当てるわよ。どこがいいかしら。肩？ それとも足？ 頭？」

恐ろしいことを、割とさりげに声は続けて言ってきた。

う、とそれを聞いて美鈴は固まった。恐ろしさのあまり逃げ出しそうではあったが、声の言うことはまったく脅しのようにも聞こえない。

相手は二人組か、と疑わなかったわけではないが、どのみち逃げる美鈴にあっさりと追いついてきたのは確かだった。

また、それがなぜかを確かめる手段も今の自分にはなく、ようは、今の状況では、どうも自分にとって不利な条件しか浮かんでこないということらしかった。美鈴は自分の置かれた状況を悟ると、おとなしくその場に固まった。

「なかなか懸命ね」

あまり温かみもない調子で、声は静かに言ってくる。

「では、懸命ついでに伝えておくけど、ここは高貴なお方の住まう領域よ。許可のない者の立ち入りは禁じられているわ。即刻この場を立ち去りなさい。妙な動きをするようなら まあ、そのほうが面

倒はないかしらね。お嬢様もたまには新鮮なものが飲みたいだろうし……」

「あ、ちよ、ちよっと待って。待ってください。あの、わたし、けして怪しい者じゃないんですが……」

「……無断で人の敷地をうろつろ歩き回っている人間を怪しいとは言わないの？」

正直、返答の代わりにナイフが飛んでくるようなら、即座に逃げるつもりで美鈴は言ったが、声は意外にもまともに答えてきた。

「す、すみません！ けして悪気があったわけじゃないんです！ た、ただここまでお屋敷の敷地が広いとは思わなかったもので……」

美鈴は慌てて言いながらも、ひよっとしたら、と思い、さらに会話を試みてみた。

もともと事を荒立てるつもりは毛頭ないのだ。相手が何者かはわからないが、まずは用件を伝えなければ、文字通り話にもならないではないか。美鈴は抵抗の意思がないことを示すように、そのまま姿を隠さずに言った。

「あのー、できれば、どなたかお屋敷の方とお話したいのですが……」

「……何か用事でもあるのかしら？」

「はい。あの、里でこちらのことを噂に聞き及びまして、是非にお願いしたいことと言いますか、折り入ってお頼みしたいことがあります……」

声は譲歩を示すようでありながら、なかなか硬い態度を崩さない調子で言った。

「主様とお会いになりたいという事？ 残念だけど、用件があるのならここで聞くことになるわよ」

「それが、少々こみいった事情もある話でして…できれば、どなたか、話の通じる方に直接お話ししたいのですが…」

これ以上は無理だろうか。

ちらりとそうは思いながらも、美鈴はあきらめずに、少し上目づかいになりながら、懇願する口調で言った。

しん、と静まりかえった林からは、しばしの間、返答がとぎれた。

(駄目…かしらね?)

美鈴はだんだんとあきらめだした顔で、あたりの様子を見守った。

しばらくして、不意の方向から茂みの鳴る音がした。美鈴がそちらを見ると、異国風の衣装を身にまとった女性が一人、木々の間からこちらへと出てくるところだった。

「…とりあえず用件を聞いわ」

## 第二回投稿分

「ええと、お屋敷の方、ですか？」

茂みの間から出てきた女性の姿に、美鈴は迷いがちになって言った。

生い茂る木々の間から姿を現したのは、古風な手伝い服姿の女性だった。実用性を重視してあるのか、袖と裾を落とした地味目な紺地のワンピースに、その上から白いヘッドドレスと、エプロンドレスを身につけていると言った格好だ。

女性、とはいったが、よく見ればもつと年若くも見えそうだった。年がかさんで見えるのは雰囲気のせいなのだろうか。見る目にも鮮やかな白銀色の髪を編み込んで垂らし、紅色のリボンがそれを飾っているのがどことなく可愛らしくも見える。全体的に柔和な印象の感じられる顔立ちだが、どこかその内には鋭さを秘めているようで、触れれば切れそうな気配をつねに放っているような、女性にはそんな印象があった。

「まあ、こちらが本職じゃないのは確かだけどね」

言いながら、女性は手にした細身のナイフをどこかに消し去った。

「それで、用というのは何？」

「はい。あ、どうも、申し遅れました」

あらためて問われると、美鈴は答えて、拳を手のひらに合わせると、丁寧な辞儀をした。

「はじめまして。わたくし、紅【ホン】美鈴【メイリン】と申します者です」

「…べつにまだ用件を聞き入れるとは言っていないだけだね」

「あ、申し訳ありません。つい癖でして…」

美鈴は悪気なさそうに笑って言ったが、女性はどこか調子がくるったような顔をして、先をうながした。

「それで、なに？」

「はい、実は、私、といいますが、実はもなにも見てのとおり旅のものでして。こちらにはつい先日、来たばかりなんです…」

美鈴は丁寧な口調で先を続けた。

「ゆえあって家なしの身一つ、こちらに来るまでは二年ばかり旅を続けておりました。ひとところには定住できぬ身の上を抱えておりますゆえ、まったく着の身着のままの根無し草の旅暮らし。されどわたくしはそれを望んではおりませんでしたゆえ、落ちついて定住できるところを探し歩いて、かなわず巡り歩いておりましたところ…」

ええと、とちよつと考えて美鈴は言葉を切った。

「実をいいますと、たいしたあてがあつてこちらに来たわけではなくてですね。来てはみたものの、身を寄せる宛はなく、路銀もたいした持ちあわせはなく、正直言いますと、たいへん途方に暮れてい

たところでした…」

美鈴は自分の困窮ぶりを表すように、たいへん困ったような顔をしてみせると続けた。

「里で働き口を探しては見たのですが、なんといいですか、さきほども言いましたとおり、それほどまっとうな身の上でないことも災いしまして。まともにはただけるような仕事もなく叩き出され、追いだされの繰り返し。ほとんど路頭に迷いかけているような有様で、そういう折にこちらのことを里の噂で聞き及びまして。こうしてうかがった次第なのです」

「…ようするに働き口を探しに来たって言うこと？」

女性は美鈴の長つたらしい口上にうんざり気味の顔をして見せた。

「ええ、まあ。ようするにそうなのですが」

「…ずいぶん変わったことを考えるのね」

「…そうでしょうか？」

やや首をかしげる美鈴に、女性はすこし頭の中身を疑うような眼差しを向けたが、対応はまともにするつもりだったらしく、「こう言うってきた。

「話はわかったけどね。わざわざご足労願っておいて悪いけれど、ここにはあなたのような普通の人間に斡旋できる類の仕事はないのよ。ま、人手が欲しいのはやまやまだけどね。そういうことだから、申し訳ないけど…」

そう言いかける女性に、「あ、いえ」と美鈴はあわてて補足して言った。

「それなら大丈夫です。　といますかですね、大丈夫といいますが、というより、その前にわたし、人間ではないんですが…」

美鈴がそう言うと、女性はなにか意表を突かれたかのように、少し目を見張るような顔になって聞きかえしてきた。

「…人間じゃない？」

「はい、あのー、これでもいちおうわたし、モノでして　あ、こちらでは妖怪と言っただけ。はい。妖怪なんですよ。私」

女性はうたがわしげに返して言い、美鈴をもう一度よく眺めるようにした。美鈴は自信なさげに聞きかえした。

「あの、はい。…えと、なんですか。わたしってそんなに妖怪っぽく見えないでしょうか…？」

「…妖怪、ねえ…」

毒気を抜かれたように言いながら、女性は眉をひそめて見せた。年相応ではなさそうな腰に手を当てる仕草が妙に似合っに見える。それからさして考えた様子もなく、女性はほどなくして言った。

「…まあ、いいわ。そういうことなら。案内しても、かまわないわよ」

「いいんですか？」

思わず顔を輝かせた美鈴に、とくに愛想も見せることなく、女性  
は言った。

「まあ、正直言つと人手になるならむしろ歓迎してもいいところなのよ。さつきも言ったとおりだけど、まともに働ける人手が足りなくてね。あとはお嬢様 屋敷の主様のことよ。そちらのご意見をうかがってからになるだろうけど」

「ええ！ 構いません。もちろん、それでもう！」

ろこつに喜んでみせる美鈴に、女性は微妙な顔をしてみせたが、  
「…ま、とりあえずついてきて」と言いながら、森の道を歩きだした。

### 第三回投稿分

「はあ…」

女性の後についてしばらく進んでいくと、ほどなくして、瀟洒な一件の館の姿が見えた。

大きな館だった。

館、というよりは、小さな城にも近いだろうか。その姿は見上げるほど高かった。また、少しぼんやりとかすんでそびえ立つ様は、あるいは堅牢な岩壁を思わせ、あるいは豪華な彫刻物の姿を思わせるようだった。館の威容を象徴する尖塔には大きな大きな時計までが据えられており、ぼやけた木々の間から仰ぎ見る姿はどこか場違いで、逆に相応しいようにも見える。

「なんとというか…すごいお屋敷ですねえ…」

「まあね」

ぼかんと小口を開けて見上げる美鈴に、どうということもなさげに答えると、「ここで待っていて」と言い残し、女性は館のほうに歩きだした。

美鈴がなんとなく目で追っていると、その姿はふつと途中でかき消えて、あとかたもなく消え失せた。内心でぎよつとしながらも、さきほど、自分が森の中であっさり追いつめられたことを思いだし、美鈴はそうか、いまのがそうなのか、とそんなことを考えた。

(なにかの術、とかなのかしらね…)

見たところ、人間のようではあるが、あの女性（そういえばまだ名前も聞いていないが）も、どこか普通ではないのかも知れなかった。なにせ場所が場所である。

なんとなく手持ちぶさたになり、特にやることもなかったのので、美鈴はあらためて辺りの様子を見回してみた。

(…、うーん…)

いたって普通の、というか、いかにもよく手入れの行きとどいていそうな洋館だった。ふもとで聞いた噂では、ここには紅魔、と呼ばれる、世にも恐ろしい吸血鬼という類の妖魔が住み着き、だいたい前から周辺を牛耳っているというような話らしい。

だが、見るかぎりではとてもそうは見えない。

玄関先の広間をちらりと見渡せば、控えめな花壇や刈り込まれた樹木までが植え込まれ、きれいにあつらえられているではないか。ここまでくると絵画にあるような大きな噴水までがありそうだが、見える範囲では見あたらなかった。

(…)

これでは普通の人間の、上流階級層の邸宅やなにかと、なんら差はないようなものだ。この主がよっぽどの変わり者なのか、それとも美鈴が知らないだけで吸血鬼というのは、みんなこういうものなのか。美鈴はなんとなく自分の格好を見下ろし、げんなりとするのを感じた。使い古してところどころほつれ、すり切れた山服姿。ひつつめた髪はろくに洗われないせいで好き勝手にびびんと跳ねており、頭垢がわき脂が差している。

(人前にさらせる格好じゃないわよねえ…高貴な方っていったし…)

先ほどから気になってなかったわけではないのだが、人間根無しではないが草稼業の旅暮らしが長くなると、なかなかまとまな格好はできなくなるものだった。少々度を超してのきれい好きだとは言わないが、不潔なのは人並みに気にする質だったので、洗濯はまめにしているつもりだが。

くんくんとシャツをつまんで匂いをかいでいると、後ろから声が聞こえた。

「待たせて悪いわね。話がすんだわ」

「は？ あ」

声に振り返ると、いつのまに現れたのか、さっきの女性が戻ってきていた。別に死角から現れたわけでもないのだが、自分の体面を気にしていた美鈴は、一瞬女性が現れたことに気がつかなかったのだ。

「あ。あ、ど、どうも。あの、それで…」

すこしあわてつつ居住まいを正すと、美鈴はことの是非を女性に尋ねてみた。女性は「ええ…」と、とくに表情を和らげてみせず、ただ小さくうなずき返して言った。

「お嬢様の了解は取れたわよ。人手が入るのなら自由にしているとのことだったから。可能なら、さっそく明日からでも働いてもらうわ」

「ほ、本当ですか？」

思わず、弾んだ声で美鈴は言った。「ええ、」と、女性はそれにあっさり頷いて言った。

「まあ、具体的に何をしてもらうかは後から言うことになると思うけど。今日のところはとりあえず、ここに泊まってもらってかまわないわよ。今、部屋を用意させてるから」

「え。あ、いや。そんな。いいですよ、気を遣っていたただかなくつても…」

反射的に遠慮を口にする美鈴に、ふむ、と女性は眉根を寄せて、何を言うのかと思えば、微妙にずれた回答をよこした。

「ああ、そういうえば妖怪だって言ってたわね。もしかして、外のほうが寝過ごししやすいものなのかしら？」

「あ、い、いえ。そういうわけでは…それは、外で寝るよりは雨露のしのげるところで寝たほうが、いくらもマシだとは思いますが…」

「だったらまったく構わないわよ。部屋はいくらでも余ってるもの」

実際、まったく問題なさそうに言うと、女性は美鈴の懸念をしりぞけて言った。

「あとは、時間が空く間にお嬢様にご挨拶でもしてもらいたいところだけど…まあ、ね。今日のところはいいわ。とりあえず」

「そうですか？ ご挨拶なら私も済ませておいたほうがとは。これからどうなるかはいえ、仮にもお世話になるんですし…」

「あのねえ…言い方が悪くなって悪いけど、あなた、まさかその格好でお嬢様にお目通りするつもりなの？」

言われてう、と美鈴は自分の格好を見下ろした。

「それは、そうですね…いえ、しかしいちおう一言くらいはなにかあったほうが…」

「そういうのはさして気になさらない方だから大丈夫よ。むしろあまり見苦しい格好で御前に立たれるほうが、こっちとしては不安だわ。事情のほうは私から納得するようご説明さしあげておくから、そういうところは安心しててちょうだい」

女性はきつぱりと言つてのけると、「はあ…」と、頭をかく美鈴にかかる手をふつて見せながら言った。

「とりあえず、屋敷のほうに来てちょうだい。そろそろ用意も出来たろうから。部屋のほうに案内するわ」

「…」

女性の案内に従つて一階ホールの扉をくぐり、どことなくうす暗い屋敷の廊下を後に歩いていく。

邸内に入ると、これもまた控えめだが、美麗に整った屋敷の壁や床が、玄関ホールの広間を覆い尽くしているのが見てとれた。土や乾いた泥に汚れた山靴では、踏み入るのもためられる有様だ。空き巣も遠慮しそうな毛足の長い絨毯が広がる床を目にして、美鈴は一瞬靴を脱いで上がったほうがいいのではとさえ思ったほどだ。

目当ての扉の前で女性が立ち止まるまで誰とも会わなかったが、なんとなく美鈴は肩がこつてくるのをじわじわと感じていた。

もともと妖怪というのは、こういう格式張って立派な清潔さにみちみちた空間というのは大の苦手としているものだった。美鈴もかなり変わり種とはいえ、やはり本能的にそういうものは感じるのだ。もつとも、妖怪でなくてもここに入ればそれは同じだったのかも知れないが。

(ん…?)

ふと後頭部に視線を感じて、美鈴はふつと振り返ってみた。

そこには誰の姿もなく、蝋燭もとまらない廊下があるだけだ。気のせいだろうか。(なんか、覚えがあるのよねえ…) 美鈴はいぶかりながらもそう思った。ごく最近感じたことのある、嫌な記憶になにか似た気配がする。

「ここよ。…どうかしたの?」

「あ、い、いえ」

適当に笑ってごまかすと、美鈴は女性に着いて部屋の中に立ち入った。狭い部屋だった。大の大人が二人はいただけでも、やや手狭になるくらいではある。扉を入れて正面に机が置かれてあり、空気をとりいれる窓はどこにもない。ぱつと見物置にも見える様子だ。

一番目につくのが右手に置かれた二段ベッドだが、これはたんに一番大きくてもつとも部屋のスペースを占領しているためだった。まさに寝泊まりするだけの部屋といった感じの、簡素きわまる内装だ。見回す、といつても見回すほどのものはなく、ベッドにさえ敷き布だけしか用意されていないが、とりあえずは部屋の中を一通り見ていた美鈴に、女性が言った。

「屋敷の使用人が使ってる部屋よ。…といつても、うちにはここを使うような使用人はいないけどね。物置代わりにするにも、ものがないものだから、完全にほったらかしなのよ」

なめらかだがきびきびとした口調で女性は続けてくる。

「シーツと枕が足りないけど、今探させてるわ。予備ぐらいすぐに見つかるものだと思ってたけど、いざ必要になるとなかなか見つからないものらしくてね。見つかったら持つてくるけど」

「あ。いえ。十分ですよ。どうぞお気遣いなく」

「そついえばあなた食事は？ 軒を貸すんだから、今日の夕食ぐらい用意させてもらうけど」

「ええと…」

ぐうつ、と口にしかけたとたん、気の利かない腹が大きく鳴り、美鈴はとたんに恥じ入ってかろく赤面した。

「…あてがないのなら、ないって正直に言ったほうがいいわよ」

「すつ、すみません…。まだ昼餉を取っていなかったもので、その…」

「とにかく夕食は用意するから。…ああ、そついえばあなた妖怪だったかしら。となると、お肉買ってこないといけないのかしらね…」

また遠慮されるのも面倒くさくなった様子で、女性はさっさと話

を進めだした。美鈴はその女性に向かって、慌てて小さく手をふつた。

「あ。大丈夫です。わたしその、普通の食事でも結構ですから」

「…普通のつて?」

「あー、ええと。普通に、その…。人間の方が取るような食事で。というか、お肉とか贅沢ですし、根菜とか青菜だけでも結構ですよ? というか私、そのほうが慣れてますし…」

「…それでいいって言うんならそうするけど。まあ、そのほうが備蓄はあるけどね」

女性はなにか要領を得ない様子で、不審げに美鈴を見た。美鈴はその視線になんとなく感じるものがあり、愛想笑いを浮かべつつも、小さく首をかしげた。

「は、はい?」

「…まあいいわ。ともかく、今日はしてもらっても特にないから、夕食までは楽にしてもらっていいわよ」

女性はあまり気にしないことにした様子で、説明を始めた。

「邸内は…まあ、歩き回ってもらっても構わないけど、ほどほどにしてもらえると助かるわね。ああ、そうそう。」

淡々とした表情でちいさく身ぶりを交えながら続ける。

「トイレの場所がまだだったかしらね。広いけど数が少ないのよ。ここ。覚えておいたほうがいいわね。とりあえず一番近いのは、この部屋を出て右側へ行ったところの、すぐ右手にある扉の中よ。洋式だけど、あなた、使ったことある？」

「あ。いえ。…洋式？ ですか？ いえ、ちょっと…」

「じゃあ、ついでに説明しておくわ。ついでに場所も教えておくら。 ああ、荷物はここに置いておいて構わないわよ。こっち。」

てきばきと指示されるままに部屋を出つつ、美鈴はなんとなくだが、この女性に徐々に逆らえないものを感じつつあった。きっかりとした勢いというのだろうか。なにか迫力のようなものを女性から感じとり、つい言われるまま頷いてしまう。

廊下を出て、言われたとおりすぐ右手に向かうと、そのトイレとおぼしき扉にはすぐにたどり着いた（ちなみに水洗トイレというものを初めて見た美鈴はなにげにたいそう感心し、しきりに驚きの声を連発するということをやってしまった）。使い方の説明を終えて、トイレから出てくると、女性は扉を閉めながら言った。

「じゃあ、もういいかしらね。私はこれで仕事に戻るけど、なにかあったら…そうね。なるべく私に聞くようにしてちょうだい。うちの子達にも言っておくけど、まともな答えは寄越さないときがあるからね。どうせおおいおいくことになるだろうから詳しい説明ははぶくけど、この館の連中にはあんまり気を許さないほうがいいわよ」

「はあ。ええと…」

あまり意味のわからない女性の脅しめいた言葉を聞きつつ、「あ

と思いだして美鈴は立ち去ろうとする女性に声をかけた。

「あのう、そういえばまだお名前のほうつかがってませんでしたけど。なんてお呼びすれば？」

言われて初めて気がついたように、女性は美鈴を見ながらかるく髪をかきあげた。

「…そういえば、まだ言ってなかったかしらね。十六夜【いざよい】  
咲夜【さくや】。十六夜咲夜よ。よろしく」

「イザヨイさん、ですか。はい。よろしくお願いします」

「名字じゃなく、たんに咲夜でいいわよ。それじゃ。またあとでね」  
とくにくだけた様子もなく、変わらぬ調子で言うと、女性はまた例の調子で、一瞬でどこかに姿を消した。何度見ても見ているほうの心臓に悪そうな技だった。ひとり残された美鈴はどうしようか、と考える顔になりながらも、とりあえず部屋に戻ることにした。

部屋に戻ると、二段ベッドの端に腰かけ、ふう、と息をつく。しばし天井を見上げてぼうとしてから、美鈴はとりあえず、重たく足を締めつける山靴を脱ぎにかかった。

「よっ、と」

長く履いている靴は頑丈だがそのぶん重たく、軽い山登りならなんなくこなしてしまうような代物だったが、妖怪の身体は頑丈に出ていて、この程度の重たさならむしろちょうどいいくらいだった。

束縛感やこもった湿気といったものまではどうにもならないが。

(この靴もぼちぼち寿命かしらねえー…さすがに山越えはきつかったからなあ…)

靴下を脱いで裸足にした足を行儀悪くベッドの上へ上げ、美鈴は足を軽くもみほぐしながらそんなことを気にした。

妖怪の身ではある美鈴だが、その実、着ている衣服は毎度毎度着替えなければいけないはめにあった。通常、妖怪であるのなら、このようなことを気にするものはいない。なぜなら妖怪にとっての人間のような姿、とはたいがい変化のことを表すからだ。

変化とは、つまり仮の姿のことだった。

変化とはたいがい妖怪が術によって姿を変えているものをいう言葉で、その服装などは、本来ほとんど自由自在なのだ。術によって自在に姿を変えられる妖怪に、着替えるという概念が必要かどうかは言うまでもなく、そんなものはもちろん必要ない。むしろ妖怪の本分というのは自由奔放であることにあり、本能の上でも理性の上でも、自身を束縛する衣服なるものは毛嫌いする性分にある。

そもそも、妖怪というのもただ無意味に人間のような姿をとるわけではない。変化はちゃんとした術なのだから、本来の姿をはなれて、人間の姿をとっている間はそのぶん疲労する。

それでもそうする必要があるのは、人間の姿をとることで人間をまどわすためで、妖怪というのは人間を好物か主食にするものだから、つまり油断させて襲いやすくすと言った意味合いがあった。その姿が華奢な少女や、妖艶な女性、ひ弱な老婆にかたよりがちなもののためである。まれにいかにも頑丈そうな山伏やひげ面の山男に変化する者もいるが、元々の意味合いを考えればそれは低劣で考えのたらない者だと言える。

意味もなく長い間、人間の姿をとっている妖怪など、まずいない。それだけで疲れる上に、本来の姿にくらべると不便に感じることも多く、熟達した長老の妖怪であっても、あくまで長期間「とってられる」程度に過ぎないのだ。つまりけしてそれを自然には感じないようにできている。妖怪というからにはそれは必ず人間以外のなにかであって、必ず正体というのが存在している。術によってまやかしているのでなければ、正体は露見する。だから妖怪のうちでも人間の姿をさほどの苦もなく保っていられる者は、格上として扱われるのだ。

少なくとも、美鈴のように、表面に垢やら汚れやらがたまるまでその姿のままできつづけたり、排泄の時にまで人間の姿でいたりすることはめつたにない。内臓の器官まで習性にあわせて再現するといったことはまずないし、よっぽどの物好きが変わり者でない限りは、どこかで必ず正体を露見している。だが美鈴にはゆえあって、その正体をさらすことさえなかった。

さて、初めてきた場所で夕食までやることもなくと、手持ちぶさたになった美鈴は、邸内を歩きまわってみる気にもなれず、保存食の中から干し肉を半切れほど切ってかじると、飢えをしのいだりしていた。

しばし部屋の中を見るともなく見たり、暇つぶしも思いつかない様子でいたが、やがて上着のボタンを外し、おもむろに服を脱ぎ始めた。頑丈さはそれなりそうなベッドに横になると、けっこう背の高い美鈴は足も伸ばせなかったが、寝心地には満足した。野外での寝食に苦にならない身ではあるが、やはり布団やベッドのあったほうがいくらもいい。枕がないので、ぬいだ上着を丸めて頭の下に入れると、美鈴はふっと目を閉じた。気疲れがこんでいたのか、美鈴

はほどなくして、そのままぐっすりと寝入ってしまった。

「…、ん…？」

どれくらい経っただろうか。ふと、くすくす、ふふ、という押し殺した笑い声を聞いた気がして、美鈴は目蓋を上げた。

(…)

なんだろう、と頭を持ち上げ、笑い声の気配がしたほうへ顔を向ける。すると、そこにはまだ子供のような愛らしい背格好をした手伝い服の娘が二人ばかり、入り口に立ってこちらを見ており、美鈴が目を覚ましたことに気がつく、ふと動きを止め、美鈴の様子をじっと見守っていた。

屋敷の子達かしら、と美鈴はぼんやりと思った。なにか用があるのか、入り口の二人は動かず、かといって何か言い出そうとするわけでもない。

このまま黙っているのも間が悪いと思ったので、美鈴はよいしょ、とベッドの上に身を起こし、すこし姿勢をただした。

「あ…どうも。こんにちは」

愛想笑いを浮かべて、頭を下げる。そのまま挨拶を述べようとしたのだが、そのとたん、口を利いた美鈴に驚いたように、入り口にいた二人は、逃げるようにささっと身を隠した。あれ、と美鈴は思ったが、どうやらどこかに行ってしまったのか、もう一度出てくるような様子はない。

(なにかしら…)

恥ずかしがり屋なのだろうか。しかしこういう屋敷に仕えるのならそういうことはしつけられていそうなのだが、それともまだここへ来て日が浅いのかなのだろうか。そう思いつつ、美鈴は肩の肩胛骨辺りをぶあり、ぼりとやりながら、あたりをうかがった。まだ寝入ってからそれほど時間は経っていないようだった。肩の辺りのかゆみに思わず手をのばしてかきながらも、そういえば身体もまだるくに拭いていないことを思いだす。

軒を借りている身でそこまで甘えていいものかはわからないが、食事の前くらいまではさっぱりしておいたほうがいいかもしれない。シャツの端をつまんでくんとくんとやると、やっぱりさつきも感じたとおり、匂いも結構なものだ(眉をひそめつつ、何度も確認してしまふ。自分で意識しないと異臭というのはけっこう気に着かないものだ)。

(さっきの子達に頼めばよかったかしら…もう行っちゃったかな?)

美鈴は部屋の外に出てみようとして、ベッドから立ち上がりかけた。が、その瞬間、がくと足がつんのめると、思いきり前のめりに倒れ込み、ベッドの縁で下腹をがつ、としたたかに打ち付けた。

「おじっ！…っウ…」

意味不明なうめき声を上げて、美鈴はなにごとかと自分の足のほうを見下ろした。なにかおかしい感触がしたからだったが、かくして、見てみれば、そこには足首の近くまでズボンをずり下ろされてパンツ丸出しになった、自分の太っちい大腿があるではないか。

「…なによお、これ…」

人間の身体の構造上、こんな有様になれば足がひっかかってすころぶに違いない。一体誰がこんなことを。かるく憤慨しつつ、そう思ったとき、部屋の入り口から「きゃははははは！」、「あ、あはははは！」と笑い転げる子供のような声が返ってきた。

「あっはははは！ ひ、ひっかかった、ひっかかった！ あはははは！」

そちらを見るとさっきの手伝い娘達が、美鈴の半ケツ丸出しで痛みにつめく姿を見て、盛大に笑い転げている。美鈴がこちらを見たのに気づくと、まるでおっかけっこを楽しむような調子で、おどけた声を上げて逃げ出した。

逃げ出すとき、見えた背中の中ほくに、ちらりとだがはつきりと薄膜のような羽根が見えた。人間だと思ったら、あれは妖精だ。美鈴はそう直感し、すると同時にようやく自分の身になにが起こったのかを悟った。

「ちよっ ああ、もう！ 待ちなさい！ こらっ！」

追いかけてようとして、ひっかかったズボンをあらためてずりあげつつ、美鈴はだつと部屋を飛び出した。ベルトを締めつつ、素早く見回して 見る必要もなく、廊下の向こうをちょこまかした後ろ姿が逃げていくのが見える。

「待ちなさい！！！」

言いつつ、美鈴はそれを追いかけた。妖精の動きはけっこう速かった上、不慣れな場所で手こずりはしたが、まあしょせん妖精の足とでは美鈴の俊足はくらべるべくもない。がっしと後ろからのばし

た手が、あつというまに追いついた妖精の襟首を、正確にとらえる。

「わっ!」「ひゃあっ!」

悲鳴をあげる妖精達を、片手に一匹ずつ持ち上げる。美鈴の怪力をもつてすれば、妖精の体重など子猫のようなものだ。長身をいかしてネコのようにつり下げると、それぞれをにらみつける。

「じらっ!」

持ち上げられて「ぎゃー!」「かいぶつー!」「はなせー!」とかわめく妖精達に、眉を怒らせて美鈴は怒鳴った。

「どうしてああいうことするの! 駄目でしょ!? まったく!」

妖精達は聞いた様子もなく、耳をふさいでわーわー騒ぎたてている。美鈴はさらに怒鳴りたてるべく息を吸ったが、ふとその後ろからそれに割り込むように声が聞こえた。

「どうかしたの?」

美鈴が振り返ると、さっきの女性 咲夜だったか がそこに立っていた。表情に乏しい顔ながら若干あきれ顔で様子を眺めている。

「あ。十六夜さん、どうも…」

なんとなく気まずくなつて、美鈴はたじろいだ挨拶を返した。とはいえ、咲夜はどことなく事情を察したようで、美鈴を見、その手にぶらさがった妖精達を見た後、小さく手をふった。

「悪いけどちょっと下ろしてくれるかしら。話したいことがあるから」

美鈴はやや渋りながらも言われたとおり、手を離して妖精達を解放してやった。妖精達はぱたぱたと下に降り立つと、咲夜の前に並んで、おつかれさまです、おつかれさまです侍従長、とおじぎをした。咲夜はその様子を見ると、二匹の顔をそれぞれに見つつ、口を開いた。

「さて、なにをしたのかしら？」

聞かれた妖精達は、下を向いたまま答えない。見た目どおりの子供のようにもじもじとしつつ黙りこくっている。

「任せていた仕事はどうしたの？ 枕とシーツは？ ヘレン」

ヘレンと呼ばれた方は、はい、お部屋にお持ちしました、とはきはきと答えた。

「ルシオラ。窓は拭き終わったの？」

ルシオラと呼ばれた方は、はい、終わりました、とはきはきと答えた。二匹の顔はよく見れば双子よりもそっくりなものだったが、咲夜にはなぜかはつきりと見分けがつくようだ。

「よろしい。それじゃ二人ともあとで私のところに来なさい。いいわね。返事は？」

はい、はい、侍従長、と、二匹は咲夜の目を見ずに答えた。しおらしく反省しきった様子がやたら白々しいが幻想郷の言葉で「妖精

が反省するようなもの」といえば、まさしく誠意のない謝罪のことをさして言う。「戻っていいわよ」と咲夜が言つと、二匹は美鈴の  
見ている前でしずしずとしたおじぎをして、すたすたと歩きだした。  
二匹の羽根のぴよぴよこ揺れる後ろ姿が、曲がり角のほうに消え  
ると、見守っていた二人の元にだだっ、ばたばたと走っていく足音  
が聞こえてきた。

「廊下は走らない！」

咲夜の気合いの入った檄がその後ろを追いかけたが、二匹は聞いたものかもわからなかった。ともかく、咲夜は妖精達の姿が音を立てる気配もなくなると、ようやく美鈴のほうを見た。

「すまなかったわね。まだ入って日が浅い子たちなのよ。勘弁してちょうだい」

「あ。いえ。まあ、たいしたことされたわけじゃないですし…」

取り繕いの言葉を聞いて、かえって美鈴は遠慮した。が、その美鈴をなぜか咲夜はじつとりとした目で見返した。

「そのわりにはずいぶん速い足だったわね。すこし見習いたいくらいだったわよ」

「あ。み、見てらっしゃったんですか…」

「仕事上、騒ぎには敏感なものだからね。ところで、ひょっとしてあなた、なにか心得とかある？」

唐突に聞かれ、美鈴は目をぱちくりとさせたが、とりあえずはそのままを答えて述べておいた。

「はあ、心得ですか？ まあ、武術ならちよつとやってますけど…」

「ふうん。武術ね…」

咲夜はなにやら考えこむように言うと、すぐに「ああ、そうだから、思いなおすようにして言ってきた。」

「お湯沸かしたから、あなた今のうちに身体拭いておいたら？ あとで布と一緒に部屋に持ってこさせておくから」

「え。あ。あ。すみません。…じゃあ、お言葉に甘えて」

「今度はまともなのに寄越させるから、安心してちょうだい。じやあ、夕食になったら呼ぶから」

言い終わると、咲夜はまたあつというまに姿を消してどこかに行ってしまった。よほど忙しいのか、てきぱきとにかくやることによどみがない女性だった。かといってある種の余裕の様な安心感があり、とりつくしまがない、というわけでもないが。

（他人のペースで仕事乱されるのとか嫌がりそうな人よね、なんとなく…）

ちよつと気をつけた方がいいかしら、と美鈴は思った。へんに遠慮を口にして手間を取らせるのは、逆に神経を逆なでするのかも知れない。

そのまま立ちつくしているのもなんなので、美鈴はもう一度部屋に戻ることにした。

軽く欠伸をしながら、廊下を戻り、よく見れば鍵もついていない扉を開ける。これでは妖精の侵入をふせぐ手段もなさそうだ。そう思ったとたん、頭部にがこん！ がん！ からからから…と、安っぽい金属音がはね返ってきた。

「…ったあ…なによお？」

痛みにつめく美鈴の目には、床ではね回るブリキの洗面器が入ってきた。どうやってしかけたものか知らないが、ともかくそれがドアの上にあったのは確かだろう。ぶちぶちと悪態をつきつつ美鈴はシーツを広げて、そこにいた親指大の蜘蛛と対面し、それをとつと部屋の外に追っ払った。ちなみに枕には大きな蛙がひつついていた。完全に小さい子供の発想だ。

(あーもう…)

いちいち付き合うのも面倒になり、蛙も扉の外に放り出してよく考えたら怒られそうだったが、いちいちつぶすのも気分が滅入りそうだった。美鈴はベッドメイクを手早く済ませることにした。かたん、という音と共に失礼いたします、と聞こえた声にドアのほうを振り返ると、手伝い服姿の妖精が立っていた。ちなみにこれも美鈴にはさっきの妖精とおなじ顔にしか見えなかった。

「侍従長のお言いつけでお湯をお持ちしました。どうぞお使いください」

手には洗面器と清潔そうな布とを抱え持っている。

「あ。ありがとございます。じゃあそこにおいともらって結構ですから…」

かしこまりました、と言われたとおり妖精は洗面器を置くと、美鈴の様子を眺め、小首をかしげて言った。

「あのう、ベッドのほうは手伝わなくてよろしいのですか？」

「え？ ああ。まあ、一人で出来ますから…」

「…でも、不慣れなのは？」

ほら、と美鈴の整えたベッドを指さして妖精は言った。

「このようにシワになったところがあると、あとで型くずれして、手間が増えてしまうんです。もうちょっとちゃんと端々を張って、シワを整えないと」

はあ、と美鈴はなんとなく恐縮した。その美鈴に向かって妖精は嫌味のない顔で笑ってみせた。

「わたしが整えさせていただいてもよろしいですか？」

はあ、と美鈴はなんとなくおずおずと承知した。妖精はちいさい身体で器用に手を加えると、いとも簡単そうにベッドを整えた。美鈴が思わず恥じ入りそうなほど綺麗な出来だ。

「ほかにはなにか不都合なことはありませんか？」

「あ、はい。どうも…」

美鈴は気まずげに頭を掻いた。

「いやあ、慣れないとやっぱりうまくいかないもんですね…」

「気にすることもないと思いますよ。私も任せていただけるとなりましたのは最近ですし。慣れない方にはけっこう難しいかと」

妖精は感じのいい顔で笑った。ちなみに妖精の顔というのは、つり目がちで細顎で人間の子供っぽい。落ちついた顔で目を細められると、どこか猫のような印象があった。

「それでは、ほかにもなにかありましたら、遠慮なくお申し付けください」

失礼します、と妖精は一礼して、静かに退室していった。はー、と感心しつつ、美鈴は見送った。妖精にもいろいろな種類がいるのだろうか。下手をすると自分よりも落ち着きがありそうだ。なんだかなあ、と思いつつ、しわひとつないベッドのはしに腰掛ける。ひそかに疑ってはいたが、調べてみても、今度はなにも仕掛けられていなかった。

## 第四回投稿分

山の夏は短い、冬の荒れようが嘘のように穏やかだった。

それだけに、人目を避けるのには少しばかり苦勞が要った。

山頂近くに至るまでは、こんな秘境であっても、いまだに生活を営む人はいるものだ。

夏山への登山の者が行方知らずになったとあっては、余計な騒ぎを招かないともかぎらない。

普通、よほどの事情がない限り、妖怪の頭はそのようなことを考えないように出来てはいるが、つい人間くさいほうへと思考が偏ってしまうのは、長年の習慣だろうか。

いよいよ山の頂が近くなると、さすがに高所であるから空気は徐々に澄み、というか、単純に言って、ここまでくると薄くなっていた。

雲はとうに途切れて空は青く高く、日の光を遮らんとするものは何もない。

こんなところに生息する生き物がまだあるのかと思われる岩肌にも、点々と原野ができ、ごく小さな花が開き、虫が這い、生命が根づいている。

もうまもなくすれば、その光景も途切れ、岩肌ばかりが目立つ殺風景な景色が眼下に広がるようになるだろう。

人跡乏しい魔境の地であっても、妖魔の脚力にはさしたる疲れも与えなかったが、噴き出る汗はこらえられない。

どうしても姿が姿であるから、さすがにうつすらと汗ばんではく  
るほどののだ。

本性をあらわして登るのであれば、どんなにか楽だったろうとは思  
うが、今ではそれができなくなったかどうかにもしがたい理由もある。

話に聞いた記憶を頼りにコンパスと地図とでだいたいの自分の位  
置を計る。

ある程度探し回らなければならぬだろう、と、ここへ来る前か  
ら覚悟はしていた。

顔なじみの年経た風妖から伝え聞いただけの話だったし、その風  
妖自身もまた、又聞きなのだと言っていた。

どこまであてに出来るかもわかったものではない。この異境の山  
脈が、古くより異界への入り口であるとされているのは確かだった。  
コンロン、とはまさしく幻想の郷そのものを表す呼び名である。

ただし、それを名づけたのもまた人間であることを忘れてはなら  
なかった。迷信や妄信の類でないなどは、誰にも言い切れたもの  
ではない。

道程は険しさを増し、徐々に平らな場所は無くなっていく。

なめらかにふくらんで削れた灰色の岩肌がどこまでも続き、隆起  
が日の光さえ遮るようになると、涼しさは徐々に寒さへと変わった。  
広い日陰を涼やかに吹き抜けていく風が、一瞬身を切るようにも  
感じられるようになる。背中の重たい荷物を、取っ手を握って背負  
いなおす。

ふと、それがまるで人間のような仕草だ、と思った。

… 思えば、人間の身体というのも、不便にできているものだった。

二足で地面を立ち歩くのに、骨も肉もかぎりなくそれに適した形でいるのは確かだったが、そもそも、この二足歩行というものの自体がたいそう生き物の身体にはよくないのだった。

ただただ歩くだけでも、かぎりなく各所に負担をかけ、それでいて飛び抜けて速く走れるわけでもなく、剛力を得られるわけでもない。

… 両手両足を用いて、四足で歩くほうが、どんなにか楽であることだろう。とはいえ、自分は、あまりに長い間この姿でいるから、もう他の歩き方も忘れてしまっていたのだが。

どれだけ登り続けたらだろうか。

山裾の影になり、日のかげる斜面を登り、その先に少し開けた場所があるのを感じた。

めざす場所はこの辺りにある。

あそこにたどり着けば、今度こそ何かが見えるだろうか、と思った。のぼりきり、立ち上がって見渡してみる。

… そこには何も見えなかった。

また同じように、灰色の岩が、群れをなして敷かれ、見渡す果てまでずっと続いていくだけだった。

(やっぱり…ないのかしら)

ふと思う。ただの迷信だったのかも知れない。  
そんなものはどこにもないのかも知れない。

幻想郷という、その名に相応しく、それは幻の中にしかないのかもしれない。…それでも、それにすがりたくて、自分はここまで来た。

まだ諦めるのは早い。

膝についた両手を上げて、また続く先へと歩きだそうとした。ふと、服の端に張りついた花びらを、吹き抜けた風が揺らしていった。…最初は、それがどういうことだかわからなかった。

(…?)

ただ、何気なく手にとってつまんだその花の一片をなんとなく見つめ、そのうち自分の記憶におもいあたるものを感じて、ふと思いついた。

(…)

目にも色鮮やかなその花は、自分の記憶が正しければ、このような高地には咲かず、初夏の豊かな平原のなかに咲き誇る。

…どうして、こんなところに。

もう一度顔を上げ、辺りを見回して、みようとして、思わず我が目を疑った。

あれだけ吹き退っていた風が、いつのまにかぴたりと止んでいる。変わったのは、風だけではなかった。辺りの景色もまた、一変していた。

灰色の岩肌はすっかり消え失せて、足もとを包むのは、柔らかな夏草の感触。一面の草原が眼前には広がり、果てのない空には白と薄い灰色をした雲が浮かんでいた。

そよそよと音もなく吹いた風が、肌をかすめて過ぎていく。強く白くかがやく日差しが、初夏のおとずれを告げていた。

呆然として、ただただ目の前の景色に見入った。

靴の裏にはげしい違和感がある。

岩を踏みしめるための登山靴が、妙に重たく感じられるのだ。

ただ、それがいつどうしてそう変わったものなのかは、まったく見当もつかなかった。まるで、狐につままれているかのようだった。

なだらかに隆起した丘を、風がどこまでも吹き抜けていく。

「…あら？」

ふと聞こえた声に振り返ると、背の短い夏草の間を、歩いている人影があった。

背はそれほど高くない。

夏の日差しを遮る白い日差しをさして歩く、短い髪の立ち姿は、なんとなく、いい所の令嬢かなにかを思わせた。落ちついた深い色

をたたえた瞳に、鳶色の髪。チエック柄の紅色合いの服に、胸元の黄色いリボンが目眩しい。

「…おかしいわね。あなた、今どこから来たの？」

一見してしとやかそうな外見とは裏腹に、やや勝ち気そうなしなやかな仕草でこちらを振り返ると、その女性はすこし笑みを浮かべ言った。

どこか胡散臭い、見る者を不吉な心地にさせる笑みが独特な気配を放っている。人間ではないのかもしれない、とふと思った。なんとなくだが。

返す言葉も持たず、ただしばしのあいだ呆然とした顔のまま女性を見つめた。

「あの…ここは、どこなんでしょう…」

「…ふん？」

女性はそう言ったこちらの姿をまじまじと眺めると、なにか面白そうな顔をした。

「なぜそんなことを聞くの？ あなたは自分の足でここまで来たのでしょうか？ なら、自分でわかるんじゃないの？」

「…はあ」

「おかしなことを言うわね」

いぶかしむ様子はみじんもなく言ってくる。

値踏みするような目には、若干の寒気を感じる。

「あなた、もしかして、今ここへ来たんじゃない？」

女性は面白がる顔のまま言った。

「……」

「偶然で来たのかしら。それとも、そういうわけではないのかしらね」

「……はあ。その……」

「ここがどこだか知りたい？」

「ここはね。幻想郷」

「……幻想、郷」

「騒がしい外の世界とは無縁の場所よ。

もっとも、そう思っているのは、外の世界の者だけかも知れないけれどね。

実際にそれほど呑気な場所かしら？ 私にはここが静かなだけのくず箱に見えるけれどね」

皮肉っぽく言ってみせると、女性はもう一度聞いてきた。

「あなたは望んでここへ来たのかしら？」

「…偶然、といえますか…望むことは望んでいたと言いますか…でも、本当に来れるとは…」

まだ混乱した頭のまま、うまく表現できずにそう告げる。

目の前の女性がなにか危険な存在だと言っことはうすうす察せられたが、あまり気も回らなかった。

幻想郷。

ここが、幻想郷。

(本当、よね…)

それとも自分は夢を見ているのだろうか。

帰り道はすでない。自分が登ってきたはずの岩山は、もつとこにもないからだ。

辺りには一面の花咲く草原が広がり、風が吹き渡っている。

「あなた、花は好き？」

「え？」

「花はあなたを好いているようだけどね」

女性はなにげない仕草で近づくと、肩に手をのばしてそっと花びらをつまみ取った。

「…あなたに花は似合いそうにないわね。」

花からは好かれそうだけれど。知ってる？ 花は呑気な者が好き

なのよ。

樹や草花は寿命が長いでしょう。自分も呑気なものだから、そばにいて心地の良い物を好くの。花に好かれない物の傍からは、しだいに花が逃げていくのよ」

女性はふわりとつまんだ花びらを風に流した。

「この花ももう終わる季節ね。

あなたがここへ来たのも、散りゆく花の気まぐれかしら。

ここでは、樹や草も意志を持つものだから。そばにいて心地の良いものを見つけて、引き込んだのかも知れないわ」

言うだけ言うと、女性はきびすを返して歩きだした。

まるでここで自分にあつたことなど、なかったかのような足どりで。それこそ妖怪なのかもしれない。妖怪は奔放で出会いを大切にすることはなく、一箇所にしがみつくこともない。

心も、体も両方だ。

(…行っちゃった…)

ぼんやりと見送って、女性の日傘が草の合間に消えていくまで立ちつくしていた。

ふと、頭にふわりとした感触を感じとって、指を伸ばしてみる。髪にも一枚、花びらが張りついていていた。

(夢じゃないのよね。ここは、幻想郷…)

つまんだ花びらを見つめ、自分に問うように言い聞かした。

幻想郷。

ここは幻想郷。

自分が追い求めた場所。

聞き分けのない幼い子供のように。

見える目を、目眩にして彷徨う人間のように、しがみついて求め続けた場所。

教えてくれた知り合いの風妖には笑われた。

求めてまでも行く場所ではないと。

妖怪は忘れられればそれまで。

逃げ込む場所を探すなど、まるで人間のすることだと。

うつすらと視界が滲んだ。

美鈴は目のはしを拭った。

「はは…」

笑みがこぼれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7829f/>

---

それいけめーりん 紅 美鈴 立志編

2010年10月9日23時33分発行